

## 第三者のコメント

ユニークなCSR報告書だ。比較してみると分かる。近年はCSR報告書をウェブサイトアップしている企業が多いから、ユニークさの確認に手間はかからない。とにかく徹底した現場主義、この点に農林中金のCSRの持ち味がある。別の表現を用いるならば、農林水産業の現場で汗を流す人々が一人称で語るところに、この報告書の頑固とも言える姿勢が貫かれている。

CSR活動の体系や仕組みの紹介は最小限にとどめ、紙幅の過半が現場からの臨場感溢れる発信に割かれている。多くはインタビューに基づく記事であり、コンパクトな寄稿文も随所に盛り込まれている。取り組みの地域的な個性と人々のパーソナリティが滲み出たメッセージが満載である。これほど多くの人物が登場するCSR報告書には、寡聞にして出会ったことがない。

ところで農林中金の場合、農林中金自身が主役となって推進するタイプのCSR活動は、割合としては小さい。20年の蓄積のあるニューヨーク支店のボランティア活動、あるいは今春に一期生を送り出した日本農業経営大学校に対するメインスポンサーとしての支援など、社会的貢献度の高いCSRも少なくないが、紙面の比率に現れているように、割合という意味では農林水産業の現場の取り組みが多数を占めている。CSRの中心は、農林中金が仕掛け人ないしは緑の下の方の力持ちとなり、地域関係者の活動を喚起し、下支えするタイプのものからなる。

この点は農林水産業の社会的なポジションとも深く関係している。農林水産業は経済活動であると同時に、地域社会そして地球社会の環境形成に直接関与する営みでもある。なかには負の影響を与えるケースもないわけではない。良好な環境形成に寄与し、ネガティブな要素を除去する点で、持続的な農林水産業はそれ自体が社会貢献の側面を有しているのである。むろん、いまある農林水産業イコールCSRというわけではない。農林中金のCSRの真骨頂は、新たな着想や萌芽的な挑戦を発掘し、これを辛抱強く育てるところにある。脇役に徹したCSRだと言ってもよい。



名古屋大学大学院  
生命農学研究科教授  
しゅうげんじ しんいち  
生源寺 眞一氏

多様な読者が想定されるが、広く国民にとって意義深いという意味では、東日本大震災の復興支援のパートが重要だ。前年と同じ16ページを割いた紙面には、ハッとさせられる記述も少なくない。例えば、県内外に避難している組合員・利用者に向けたJAふたばの組合長の言葉は、震災の風化が懸念される社会全体への発信でもある。あるいは、震災直前にコンピュータシステムを3階に移設していたため各種業務を早期再開できたJFりょうりの経験は、被災地以外のオフィスにとっても有益なメッセージとなったはずだ。

読者の多くは農林水産業の関係者であろう。ここで強調しておきたいのは、農業の関係者が水産業の取り組みからヒントを獲得し、林業の関係者が農業の取り組みから新たな着想に至るなど、分野横断的な情報交流の重要性である。農林中金のCSR報告書は、隣の分野の先駆的な活動をコンパクトに伝える情報交換媒体としても機能するに違いない。農業が専門の私には、育てて獲る漁業の先進例や森林組合の若手・女性の活躍ぶりなどが強く印象に残った。

農林中金は金融機関である。したがって、CSR活動においても利子助成を含む資金面からのサポートが活用されている。けれども、この報告書が伝えてくれるのは、支援を受けた活動が狭い意味でのビジネスを超えた社会的・文化的な価値を生んでいる事実である。金融機関としての働きかけをバネに、お金に換算できない価値を創り出すところに、農林中金のCSRの特色がある。ここは農林水産業や地域社会に関心を寄せる若い読者に伝えたいところである。